歯科技工研修科 50 周年に寄せて

～歯科技工研修科で学んだことと現在 ～

i- Dental Lab　伊原啓祐（30 期）

歯科技工研修科設立 50 周年おめでとうございます。自分の年齢（43 歳）を考えても 50 年の継続というのは未知の域で、考えれば考えるほどすごいことだと感じております。そして、長きに渡り歯科技工研修科（以下、研修科）を牽引され、2022 年 3 月にご逝去された水野行博先生への感謝とご冥福をお祈りし、書き出しとさせていただきます。私は基礎課程、上級課程と 2 年間の研修生として過ごし、3 年間のラボ勤務を経て 2006 年に大学職員となりました。その後、16 年間在籍させていただき 2022 年 1 月に退職、準備期間を経て同年 7 月、鶴見に歯科技工所を開設しました。本稿では研修生時代も含めた 18 年で学んだことと、近況について報告したいと思います。

【研修科で学んだこと】

研修科で学んだことは数え切れません。技工の観点で言えば、基礎技術や知識が身についたのはその後の大きな基盤となりました。臨床面では治療見学やセット見学ができたことは、現場でのニーズを肌で感じ取ることができ、とても貴重な経験となりました。さらには、教育も担当させていただき、その面白さと難しさで自分自身が大きく成長したと感じています。その他にも学んだことはたくさんありますが、特に思い出深い内容を書かせていただきます。

当時、水野先生から『問題解決型の思考』が大切だと、様々な場面でアドバイスいただいておりました。しかし、正直に言うと『問題解決型の思考』の意味が具体的にはわかりませんでした。そんなある時、担当していた全顎的な症例のプロビジョナルクラウン（以下、プロビ）が破折したと治療室から連絡があり修理を行いました。全顎的な症例では治療期間が長く、プロビの破折は珍しいことではありません。加えて大学附属病院に来院される難しい症例ということもあり、破折頻度が高かったです。このプロビの破折は、患者・歯科医師・歯科技工士の 3 者にとって誰も得をしない問題であると頭を悩ませていました。対策として、プロビに補強線としてワイヤーを入れたりもしましたが、クリアランスが厳しい症例にはワイヤー走行位置の設定が難しく、屈曲にも時間がかかるといった問題がありました。そこで、ポリエ

図 1

ポリエチレンファイバー　コンストラクト（kerr）

図 2

図 3

コンストラクトなし　　コンストラクトあり

チレンファイバーにコンポジットレジンを含侵させて使用する材料を補強線の変わりに使用しました。（図１）また、コンポジットレジンと常温重合レジンの接着に心配があったため、含侵したコンポジットレジンを光重合する前に常温重合レジンのポリマーをふりかけて対応しました。（図２）このことで常温重合レジンが接着し、薄くて丈夫な補強線を大型のプロビに入れることができました。その結果、大型のプロビが壊れてバラバラになることはありませんでした。（図 3）この一連の流れを見ていた、水野先生から『まさに問題解決型の思考だ』と言っていただき、その言葉の意味を理解したのというのを鮮明に覚えております。問題が生じたときに『解決策を考える』 という習慣が身についたことが研修科で学んだ一番のことだと思っています。

【ラボ開設の道のり】

大学を退職後、ラボの場所探しが始まりました。希望としては、自宅のある鶴見でと考えていましたが、かなり難航しました。当初は先入観からマンション一室で簡単に始められるものかと思っていましたが、コンプレッサーや日常技工の騒音問題を考えると事業用の物件でないと難しいということがわかり選択の幅が狭くなりました。不動産屋を回り、数回の内見をしましたが、賃料と広さのバランスが合わず時間を費やしました。やっとのことで物件が見つかり、いよいよ準備が始まるかと思った矢先に話が頓挫しました。物件によっては建物での電気使用量に上限があり、希望の電気容量で契約ができず、できたとしても同時使用量に制限があるとのことでした。思わぬところでつまずき、鶴見でのラボ開設をあきらめました。仕方なく、JR 沿線で物件を見つけ、話を進めていましたが、再び電気容量の問題で流れることになりました。正直、こんなに苦労するとは考えていませんでした。ところが、その翌日、業者から鶴見に物件が出てきたとの連絡が入り、さらに懸念していた電気容量の問題もクリアになりとんとん拍子で契約となりました。一度はあきらめた鶴見でのラボ開設ではありましたが、結果的に鶴見に決定しました。不思議なものです。技工の神様から『お前は、鶴見でやりなさい』と言われているよう感じました。また、ラボの機材設置の際には研修科の後輩で東京技研に勤務する北村慎吾さん（34 期生）が担当となり実際に作業をしてくれました。これもまた、鶴見の縁を感じる出来事となりました。（図 5，6）

図 5

図 6

冒頭にも述べたように、私の技工人生 22 年のほぼすべてが鶴見大学で過ごした時間です。自分の芯にあるのは『鶴見イズム』であることには間違いありません。水野先生にご指導いただいた『問題解決型の思考』をもとに知識や技術、経験を活かしてラボ運営を行っていきたいと考えています。最後になりますが、鶴見大学と歯科技工研修科の益々の発展を心よりお祈り申し上げます。